
サンス、サン=テティエンヌ大聖堂中央扉口の図像プログラムについて
—基壇部と扉口全体の関係を中心に—

フランス、ブルゴーニュ地方北部のサンス、サン=テティエンヌ大聖堂西正面中央扉口彫刻は、12世紀末～13世紀初頭に制作された初期から盛期ゴシックへの過渡期の作例である。基壇部に豊かな装飾が施され、隅切台座部左には①「プシコマキア」、右に②「黄道十二宮」が配置され、幾何学文様の下段を含む3段構成の基壇の左上段には③「自由七学芸」、右に④「12か月の労働」、中段には⑤「獅子と戦うサムソン」「ゴリアテと戦うダヴィデ」「レスリング」「武器で戦う人」、⑥楽器を弾くロバ、象などの動物が表される。基壇部に複数の主題を伴う図像表現のある最初期の作例にもかかわらず、先行研究では、扉口全体の図像プログラムにおける基壇部の機能には全く言及していない。本発表では、こうした基壇部の機能に関して、I.扉口全体の主題との意味的関連性、II.扉口の建築的要素を利用した主題の論理的構成において果たした役割という2点から考察する。

I. 当初のタンパンが、キリスト教最初の殉教者である聖ステパノの生涯を描いたものに取り替えられてはいるが、扉口全体として終末論的な主題が扱われている点で変化はないものと発表者は推定する。①はロマネスク期から扉口上部に頻繁に審判図と配置され、魂の戦いや善と悪との戦いを示す⑤も終末論と結びつく。①の既に悪徳に勝利した表現の美徳は⑤の戦闘中の図像の結果を示すと考えられる。サンスの基壇部は上下間で垂直的に扉口の主題である終末論と意味的関連を形成し、基壇部の図像主題と扉口中心主題との密接な関連が指摘できる。

II. サンスの基壇部に配置されている図像主題のうち②③④はオータン、シャルトルなどのロマネスク～ゴシック初期教会堂扉口ヴシュール等の扉口上部に配置されていた。これらの主題が基壇部に配置された理由のひとつに12世紀後半よりタンパンの主題がアーキヴォルトへ拡張する傾向が顕著になった点があげられる。それはサンリスにおいて基壇に②④が配置されたことから窺える。また②③④の主題は連続した図像から構成されるため帯状のスペースを必要とする。とりわけ②④は多くの場合上下一組で配置され、意味をなす。これらの主題は以上の経緯も踏まえ、基壇上部に配置されたと考えられる。

一方、①⑤⑥については基壇部及び扉口に階層性を付与する意図のもと配置されたと推測できる。①と⑤の扉口主題への関与の位置的關係及び周縁の動物である⑥が最下部に配置され、タンパンのキリストを考慮に入れば、複数段からなるサンスの基壇部は扉口上部へと向かう垂直的階層性の形成に大きく寄与していると言える。

サンスの基壇部は扉口全体の主題と有機的に結びつき、その図像主題は基壇部の扉口における位置や形態を踏まえた論理的構成に従い配置される。サンスの扉口は、基壇部への図像の導入によって扉口全体における図像構成原理が変化した画期的な作例と位置づけられる。